

『恋する時をかさねて』

著：名倉和希

ill：小路龍流

風呂から上がってきた筒井は、ダイニングテーブルに並べられた料理の皿に目を丸くしたが、祐一が勧めると椅子に座った。そして「実は腹ペコだった」と言って、大根と鶏肉の煮物ときのこの味噌汁、キャベツとベーコンの蒸し物、ご飯一膳をぺろりと食べてしまった。

「ごちそうさん。美味かった。森山さんは料理が上手いな」

気持ちいいほどきれいに食べてもらえて、祐一は自然と笑みがこぼれた。

「そうですか、よかったです、お口に合ってます」

「男もいまどきは料理くらいできないとダメだって聞くからな。家を持ってて、きちんと仕事をしていて、家事ができるうえにその甘いマスクなら、モテるだろう」

「モテませんよ。僕はずっと寂しい独り者です」

実際は女性と付き合うチャンスはいくらでもあった。派手さはないが優しげな風貌と真面目な性格は、安定を求める女性に人気があるようで、高校くらいから何度も告白された。だが祐一は一度も付き合おうと思ったことがなかった。

母親は妻子ある男と関係を持ち、祐一を身籠った。この家は祐一の父親から買い与えられたもので、祐一が高校を卒業して地元の企業に就職するまで、生活費のすべては父親から送られていた。

父親の自宅は都内にある。たまに訪れる父親を、母親はただ待ち続けた。自分の勝手な都合で一人の女の人生を振り回した父親と、そんな生活に甘んじているしかなかった母親の関係を、祐一は納得できない思いを抱えながら見て育った。

愛情と、肉欲と、打算。男女の間には、さまざまな感情が複雑に入り乱れている。必ずしも美しくはない。祐一は肌で感じ取って、知ってしまった。

そのせいか、女性に好意を示されても、付き合う気にはなれなかった。女性をきれいだと、可愛い、一緒にいたら楽しいかもしれないとは思っても、その先に肉体的な関係が待っていると思うと、一步を踏み出すことができなかったのだ。

「ずっと独り身、ね……。この家に女を連れこんだことはなさそうだな。そういう空気は感じない」

「空気ですか」

「俺は鼻がきくんだ」

筒井は祐一をじっと見つめて、意味深に笑った。なにか含みがあるような笑みだったが意味がわからず、祐一は曖昧(あいまい)な微笑で受け流す。

「……あの、筒井さんの寝る場所ですけど、リビングのソファでいいですか？ 三人掛けなので、僕くらいの身長ならなんとか寝られるんですが。筒井さん、背が高いから窮屈かな……」

「いや、大丈夫だ。確かに足が盛大にはみ出るだろうが、まだそんなに寒い時期でもないし。拾ってもらえなかったら濡れたまま夜通し歩いていたわけだから、それを考えたら天国みたいなもんだ」

了解してもらえて、祐一はホッとした。実は母親のベッドが空いている。最後の入院に出かけた朝のまま、家具も衣類も化粧品まですべてが二年前のままだった。空気の入替えと掃除はたまにしているので、いつでも使えるが、なんとなくあの部屋には誰も入ってほしくなかった。まだ祐一の中で、母親の死についての整理ができていないからだろう。

「じゃあ、あの、僕はお風呂に入ってきます」

自由にテレビでも見ていてくださいと言い置いて、祐一は風呂を使った。ひさしぶりに湯に浸かったが、のんびりと入浴タイムを楽しむ精神的な余裕はなく、すぐに出た。筒井がどうしているのか気になる。

いつものパジャマに着替えて、祐一はせかせかとリビングに戻った。ほんの十分ほどで入浴を終えてきた祐一に、テレビで夜のニュースを見ていた筒井は「風呂に入るのいつもこんなに早いのか？」と聞いてきた。

「え……と、まあ、そんなに長いほうではありませんけど……」

落ち着かない自分を反省しながら、とりあえずお茶を淹(い)れた。筒井の前に「どうぞ」と湯呑みを置き、次はなにをしようかと考える。

「あ、そうだ、毛布」

筒井用に毛布を出さなければならない。祐一は自分の部屋に行き、クローゼットからしまっていた毛布を出した。急ぐ必要はないのに、慌てていたらしい。抱えた毛布で前がよく見えなかった祐一は、ラグの端に足を引っかけた。

「あっ」

バランスを崩して毛布ごと本棚に倒れこんでしまう。どんとぶつかった反動で、何冊かの本がバラバラと頭上から降ってきた。

「痛たた……」

一冊だけ角が額に当たり、かなり痛かった。足元に散らばった本を、茫然(ぼうぜん)として見下ろす。

こんな馬鹿ばかしい失敗ははじめてだ。完全に浮き足立っている。バタバタしている自分は、筒井の目にどう映っているのだろうか。そう考えはじめると、恥ずかしくなった。いったん毛布を置いて、散らばった本を片づけてから、リビングへ行った。

「この毛布を使ってください。まだそんなに寒い時期ではないので、これだけで大丈夫だと思います」

「ありがとう」

毛布を筒井に渡すと、にっこりと笑みを向けてくれた。

「さっき物音がしていたが、どうかしたのか？」

「あ、え……ちょっと、本を落としてしまっただけです。本棚にぶつかって……」

「ぶつかった？ 本棚に？ けっこうそそっかしいんだな」

「………はい」

恥ずかしい。正直に言わず、適当にごまかしてしまえばよかった。

それからすこしだけ世間話をしてから、祐一は腰を上げた。

「じゃあ、あの、おやすみなさい」

まだ筒井のそばにいて話をしたい気分だったが、いろいろとハプニングが重なって疲労しているだろうから、祐一は自分の部屋に引っこむことにした。

「ああ、おやすみ」

筒井はあっさりと応えて、引き止めることはなかった。ほんのすこしだけがっかりしながら、祐一はリビングを出て部屋に行く。神経が高ぶっているのか、いつもの就寝時間を過ぎているのに眠気はなかった。ベッドに上がり、サイドチェストに置いてあった読みかけの本を手にする。ベッドヘッドにもたれて活字を目で追ったが、なかなか内容が頭に入ってこない。本に集中しようと思えば思うほど、視線が活字の上を滑っていくだけになる。

三十分くらい努力してみたが、ひとつ息をついて本から顔を上げた。もう今夜はなにをしてもダメだ。無理やり寝てしまおう。部屋の照明を消して、サイドチェストのランプだけにした。目を閉じて、寝ることだけに集中する。いつもなら寝付きはいいほうなのに、なかなか睡魔は訪れない。それでもなんとか、うとうとしはじめたころだった。キィ…と、かすかに軋む音が聞こえて、祐一は眠りの底に沈みかけていた意識をわずかに浮上させた。

「なんだ、寝ちまったのか？ それとも、寝たフリしてるのか？」

笑みを含んだ囁(ささや)きに、祐一は重いまぶたを上げた。すぐ目の前に筒井の顔があり、一気に目が覚める。

ランプのオレンジ色の光に照らされた筒井は、夜だというのに目を輝かせていた。獯猛(どうもう)な獣を連想させる。夜行性の獣が、まるで獲物を狙(ねら)っているような—。「やっぱり起きてたか。そうでなきゃ、わざわざリクエストに応じて忍んできた甲斐がないってもんだ」

「つ、筒井さん？」

リクエスト？ 忍んできた？ いったいなんのことだろう。

わけがわからなくて首を捻(ひね)っていると、筒井は祐一が掛けていた毛布を半分ほどめくってしまった。予想だにしない展開に、祐一はびっくりしすぎて硬直する。

「あ？ 色気がないな。裸で待ってるのかと思ってたのに」

「は、は、裸っ？」

筒井は祐一のパジャマのボタンを外しにかかった。露わになっていく体に、筒井の視線を感じた。

本文 p27～33 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>